

「県障害福祉課長に就任して」

和歌山県福祉保健部福祉保健政策局障害福祉課長 巽 清隆

平成20年4月に和歌山県障害福祉課長に就任いたしました。昨年までは、こども未来課で子どもに関する福祉の推進、ひとり親家庭対策、女性保護、少子化対策などに取り組んでおりました。

さて、障害者自立支援法が平成18年4月から施行されたことにより、障害者に身近な市町村が一元的にサービスを提供するとともに、障害の種別（身体障害・知的障害・精神障害）にかかわらず、必要なサービスを利用できることとなりました。また、施設・事業体系に関して利用者本位のサービス体系への再編がなされるとともに、就労支援の強化、支給決定の透明化及び明確化、費用を皆で負担し支え合う仕組みとなっています。施行後2年を経過しましたが、更に、利用者負担の見直し等制度の周知や、既存の施設・事業の新体系への円滑な移行に取り組んでまいります。

今年度は、グループホーム等の更なる充実支援に取り組むとともに、地域生活支援事業における専門性の高い相談支援事業として、脳血管疾患や交通事故などにより脳機能に損傷を受けた高次脳機能障害者を支援する拠点を新たに整備し、相談支援体制の充実を図ります。また、精神科病院に入院している精神障害者のうち、病状が安定しており病院外の受入れ条件が整えば退院可能である方の退院を促進する事業を県内全域で実施します。

また、平成16年3月に策定した「紀の国障害者プラン2004」（計画期間：平成16年度～25年度）を改定するとともに、平成19年3月に策定した第1期障害福祉計画（同：平成18年度～20年度）の進捗状況及び障害保健福祉圏域の現状を把握したうえで、圏域毎の目標をまとめ、第2期障害福祉計画（同：平成21年度～23年度）を策定します。

その他、精神保健福祉の分野においては、精神障害者や社会的ひきこもり者の社会参加に向けた支援、精神科救急医療システムの円滑な運営等が課題であると認識しています。また、災害や学校等における大事件発生直後の「こころのケア」にあたる「こころのレスキュー隊」は、昨年8月23日に発足しました。自殺対策についても、昨年12月20日に県自殺対策連絡協議会を設置したところであり、今年度は、自殺対策庁内連絡会を開催するとともに、うつ病の早期発見・治療推進のため、かかりつけ医研修を実施します。

なお、10月24日に、厚生労働省及び（社）日本精神保健福祉連盟主催の第56回精神保健福祉全国大会を和歌山市で開催しますので、関係の皆様には御協力の程よろしく申し上げます。

もくじ

- P 1 障害福祉課長に就任して
- P 2 精神保健福祉センターの事業等 / 蜜柑のこころ
- P 3 社会福祉法人つばさ福祉会「エコ工房四季」
- P 4 県内各地のたより
- P 5 メンタルヘルスニュース
- P 6 は一とふるネットワーク
「障害児者相談センターゆず 大前 健さん」
研修のお知らせ

センターの事業等

ひきこもり・思春期相談(予約制)

専門医によるひきこもり・不登校など思春期・青年期に起こりがちな問題に関する相談を原則として第4金曜日に実施しています。

グリーフケア相談(予約制)

自死(自殺)により大切な人を亡くされた方の死別による悲しみからの回復をお手伝いするための相談を月1回実施しています。

精神保健一般相談(予約制)

相談日時は原則として月曜日～金曜日の9時～17時45分です。受付はなるべく16時30分までに済ませてください。

青年のつどい・フリースペース

社会的ひきこもりの方の居場所の一つとして、毎週火曜日午後1時～4時に実施しています。参加を希望される方はご連絡下さい。

社会的ひきこもり家族のつどい

家族同士の分かち合い、情報交換の場として、各月に開催しています。参加を希望される方はご連絡下さい。

こころの電話相談

精神疾患、認知症、アルコール問題、不登校、ひきこもりなどこころの健康に関して電話相談を行っています。(相談時間は原則として月曜日～金曜日の9時30分～12時、13時～16時)
こころの電話(専用) 073-435-5192

心のスイッチが入れかわる瞬間

“5月病対策”の推薦本として、新聞の読書案内に、瀧本新著『「ダメの壁」を越える魔法の心理学』が紹介されていました。さすがに“魔法”はなくても、心の健康につながるちょっとしたキーワードやエッセンスが拾えるかも、と早速書店で購入。読み進めることにしました。

この本の中で筆者は、「何をやっても、自分はダメだ」というカラのなかに閉じこもった状態を「ダメの壁」と定義。でも、「ほんの少し視点を変えるだけで思わぬ解決策が見えてくる」と説き、そのための方法を「簡単なワーク」としていくつか紹介しています。私も実際にやってみました。

まずはステップ1、「とりあえず自分の特徴を書き出す」。うむ、“毎回ものごとを先のばしにする”が第一に挙げられよう(これについては即決)。続くステップは、「書き出した特徴をプラスの表現に変える」。ならばさあたって“容易に目先の物事にふりまわされない”といったところか。でも私は結構まわりに影響されやすいぞ?!・・・新たな「壁」が出現、少し視点をかえるだけでも結構エネルギーがいるなど実感。

私は、この本のテーマである自分自身や物事の“とらえ直し”について考えたとき、芥川龍之介の短編『蜜柑(みかん)』を思い出しました。ご存知の方もおられると思いますが、概要は以下のとおりです。

ある曇った冬の日暮れ。私(芥川龍之介自身)は、「云いようのない疲労と倦怠」を抱えて、横須賀発上り二等客車に乗り込む。そこに、13,4歳の小娘が1人、慌しく中に

入ってきて向かいに腰をおろす。いかにも田舎者で不潔感のあるこの小娘に、私は、「人生の象徴」を感じ、不快さと苛立ちを募らせる。それは、しばらくして小娘が不可解にもトンネルに入る汽車の窓をこじあけ、喉を害する私に煙を浴びせかけることでピークに達する。しかし、次の瞬間、そうした小娘の不可解な行為が、実は、奉公先に赴く小娘を踏切まで見送りにきた弟達に、蜜柑を届けるためだとわかる。それと同時に、私の心の中には、今までにない「得体の知れない朗かな心持ち」が湧き上がってくる。

それまでの陰鬱な気持ちがある瞬間を機に、まるで暖かな日の色をした蜜柑のような朗らかな心境に変化する。わずか7ページのこの短編には、そうした奇跡のような、でも実はありふれた日常の瞬間が描かれているような気がします。

苦しみや悲しみの渦中にいるときや、「ダメの壁」に阻まれているときは、あれこれやってみても結局は空まわりに終わったり、何とかしようとする気力すら湧かないことがあります。けれど、物事のとらえ方の転換点、つまり、心のスイッチが入れかわる瞬間は、あえて意識的に努力しなくても、ある日ある瞬間ふと自分の身に降ってくることもあるのではないのでしょうか。改善への手だてを考える一方で、そうした瞬間を信じること、大切にすることを心にとめておきたい。『「ダメの壁」～』のワークをやりながら、ふとそんなことを考えました。

(臨床心理士 北川 朋子)

このコーナーでは、シリーズで県内の組織やグループの活動を紹介します。

社会福祉法人つばさ福祉会

『エコ工房四季』

平成19年4月1日から就労継続支援B型事業所として串本町古座（古座川病院の裏）にて活動を始めました。

その生い立ちは、旧串本町で活動していました「つばさ共同作業所」と古座川町で活動していました「若あゆ作業所」です。その2つの無認可作業所が障害者自立援法の制定契機に県のご指導を得て、社会福祉法人として活動を共にすることになり、一年が経過しました。

その活動内容をご紹介します。

生い立ちが異なる2つの作業所の統一目標として、① 多くの人と交わり自分の可能性を伸ばす ② 自律した生活を目指す。③ 社会での役割を果たすの3つの活動指標を旗印に掲げています。

それから、「エコ工房四季」の「エコ」ですがエコマークなどをご存知のあの「エコ」で、人間と自然との望ましい関係を探り其の実現を目指す取り組み全般を指す言葉のあの「エコロジー」の略称です。事業所の名称の「エコ」が時代の寵児であるからの採用ではなく、自然保護や環境保全のための社会運動にみられるエコロジーの本質は『共生と循環』にあります。私達が目指す障害者の地域社会での生活の維持・継続のためには、この「共生と循環」の考えがどうしても必要で、エコロジーにその一致点を見出したからです。

共生のためには、利用者は施設内での利用者同士や職員といった限られた場所・関係での活動ではなく、作業をとおして、地域社会で多くの人々と定例的・不定期的に交流出来る機会を設けるようにしています。具体的には、町ゴミ処理場でのゴミ分別、公衆トイレの清掃委託業務、パンの委託販売、地域の借地での農作業、商店への自家製品の販売等積極的に地域に出向き、地域の方々との面識の場を意図的に設けた活動に取り組んでいます。

それから、名称の「エコ」に相応しく、活動のための有効な手段として、「電子水製造装置」や「EM液培養器」を所持し活用しています。



電子水製造装置で作られた電子水は植物への水やりだけでなく、電子水に重曹を溶かした溶液を作り、トイレ清掃時の洗面場・便器の洗浄に重宝しています。また、多量の電子水を使い培養器で製造したEM培養液は土壌改良材としてのみならず、事業所が出る生ゴミの処理に使ったり、米のとぎ汁と糖蜜とを加え発酵液をつくり、公衆トイレの床洗浄に使ったりしています。これは、私達に身近な清流古座川の水系をまもるための工夫もあります。

昨年1年間はあるという間に過ぎてしまいました。利用者数も、年度当初、一日平均18名でしたが、今では、平均22名へと増加しました。工賃も県平均レベルは支給できました。しかし、今年は主要委託作業からの撤退など新しい作業への取り組み課題が山積みですが、それ程悲観はしていません。見渡せばこの串本、古座川の地にはまだまだ未開発の資源が多く眠っています。この土地ならではの生産活動の創造への取り組みと、『共生と循環』の思想の更なる肉付けを目指し頑張ります。皆さんご期待下さい。



ほっとする私の街のこころの診療所について

橋本保健所 長島 隆

平成20年3月15日(土)、医療法人郷の会こころの郷クリニックにて、「ほっとする私の街のこころの診療所」と題して地域の精神保健福祉啓発イベントを行いました。

これは、橋本保健所と岩出保健所の共催で、県の精神障害者家族教室事業及び精神保健福祉ボランティア事業の一環としての事業です。

第一部は、社会的ひきこもりの作業所エルシティオによる「ミニコンサート」、第二部は、県立こころの医療センターの生駒芳久医師による「講演会」でした。

出席者は、約110名あり、事業の直接の対象者である家族やボランティア以外にも、地域の民生児童委員の人達等、大勢の参加がありました。

この企画の目的の一つとしては、地域住民にとって「できるだけ精神科や神経科の敷居を低くしていく」ことにある点にあります。

幸いにも、平成19年6月に、医療法人郷の会のサテライトクリニックとして、街中に神経科クリニックができました。外の塀が、人の背丈より低い位置にあり、クリニックの中がオープンに見えるような作りになっています。クリニックの中庭には、あずま屋や池があり、地域の住民の憩いの場として十分に活用できる環境にあります。この場所をお借りしてイベントを行いました。

エルシティオのメンバーの勢いのある演奏や唄に圧倒され、生駒先生のご自分の体験に基づいたストレスについてのお話しにほっとさせていただきました。

その他にも、(株)ヤンセンファーマのバーチャルハルシネーションで統合失調症の精神症状である幻覚・幻聴体験ができました。エルシティオの自家焙煎コーヒー、あるべじおの椎茸販売も、あっという間に完売でした。

会場の皆さんにも神経科や精神科が特別な所ではないということ改めて認識していただけたと思います。今後も単発ではなく継続した取り組みを他の関係団体との協力体制のもと行っていきたいと思ひます。



「こころのフェスティバルin熊野2008」

新宮保健所 栗栖 由佳

平成20年3月1日(土) 13:00から那智勝浦町福祉健康センターにて和歌山県東牟婁振興局と南紀のこころの医療保健福祉をなんとかしよらネットワーク(通称なんなんねネット)と共催で『こころのフェスティバルin熊野2008~くらし・つどい・まなび・ささえあいはじめよう~』が開催され、121名の参加がありました。

まず、和歌山県退院促進支援事業を受託している「やおき福祉会」の自立支援員北山雅史さんから「地域で生活するという事」と題して基調講演が行われました。この事業を通して、入院者との面会を定期的に行い、外出支援・外泊体験を繰り返していく中で北山さんが経験したことは、長期入院の重みと、患者さんの変化に寄り添える喜びなどが語られました。

シンポジウムでは、東牟婁県域内の当事者・家族・支援者からそれぞれ発表がありました。当事者からは、グループホームを出てアパートでホームヘルプサービスを利用しながら生活することの楽しさやしんどさ、夢などが語られました。家族からはひまわり家族会屋敷会長が、家族会の入会者が少なくなっていることの報告がありました。

支援者からは、岩崎病院の井谷副院長が訪問看護や外来SSTなど新しい取り組みを紹介され、当事者主体のリハビリテーションや福祉が重要であると話されました。さらに、どんぐりの家共同作業所や相談支援事業所「ゆず」から活動報告などがありました。最後に座長の尾崎代表から、「今後はより当事者のニーズに近い支援を東牟婁地方独自のものを実施していこう」と呼びかけがありました。会場外では、各団体の作品や紹介パネルなども展示され、休憩の間も話し声が絶えない活発なフェスティバルとなりました。



和歌山メンタルヘルスニュース

県内の精神保健福祉関連の最新情報と当センターの活動をお知らせします。

○ ひきこもり家族教室

1月11日（金）と1月25日（金）に第4回と第5回の家族教室が開催され、延37名の参加がありました。

11日は「子どもから親に伝えたいこと」というテーマでエルシテオ指導員の鴻原崇之氏とエルシテオの仲間にご自分の体験を語って頂きました。親に対しては、上から意見を言われると構えてしまうので、出来るだけ同じ目線で話をしてほしいという要望がありました。

また、25日は紀南地方ひきこもり家族会「ほっこり会」代表の垣内里美さんに「家族会に出会えて」というテーマで話題提供をして頂きました。しんどさ比べをしないことや新しく参加した人の気持ちを大事にゆっくりお話を聞くように心がけるなど家族会の運営についての話題へと発展しました。参加された方からは、子どものいいところを探しなで元気のなるプログラムを望む声が多かったです。

○ ひきこもり講演会

1月20日（日）橋本市にて、一般の方30名を対象にひきこもり講演会を開催しました。「私たちの未来」と題して情報センターI S I Sの山田孝明代表と、当事者2名の方に講演して頂きました。家庭の中では当事者の方が、家族の病理を背負ってしまうこと、昔の日本ではできていた「半人前」の当事者を受け入れる社会の仕組みが必要なこと、当事者の方が中年層となっており、それを支えるご家族が高齢化していることなどのお話がありました。当事者の方の心情の変遷なども伺い、いい勉強となる講演会でした。

○ 災害時のこころのケア研修会

2月3日（日）那智勝浦町福祉健康センター、2月15日（金）ビッグ愛において開催されました。

2月3日は石川県こころの健康センター初等清田吉和先生をお迎えし、地震後のストレス反応、こころのケア活動の体制など石川県能登半島地震での取り組みの実際について講演して頂きました。保健福祉従事者をはじめ、民生委員や消防署員など92名が熱心に傾聴し、おおまかな手順がわかった、参考になったといった意見が寄せられました。

2月15日の研修会では、保健福祉従事者や教職員など66名の参加がありました。午前中は、グアテマラ共和国のDr. ルベン・ゴンザレス先生と和歌山大学の宮西照夫教授からグアテマラ共和国での内戦被害とハリケーン被害へのこころのケアの国家的取り組みの紹介を、午後からは新潟県精神保健福祉センター参事の野口晃先生と新潟県十日町地域振興局の保科志貴子先生から新潟県での地震の時のこころのケア体制と取り組みの実際についての紹介がありました。日頃からしていないことは災害時には出来ないことや、することがある程度わかっている程度であれば活動しやすいということや3日、15日のいずれの講演の中でも災害時のこころのケアの重要性が述べられていました。

○ こころの健康講座(平成19年度第2回)

3月7日（金）に和歌山県勤労福祉会館プラザホープにて、こころの健康講座を開催し、「ストレスとこころの健康」について、臨床心理士・シニア産業カウンセラーの日野映子先生を講師にお迎えしました。約80名の方が参加され、ストレスに対する理解と予防・対策への取り組みについて学びました。

○ 社会復帰関連問題研修

3月10日（月）、国立精神・神経センターACT-Jプロジェクトの梁田英麿氏による「ストレスモデルを使ったケアマネジメント」の研修会を実施しました。35名の参加があり、その人のストレスに注目したケアマネジメントの方法、講師の事例への関わり方などとても参考になりました。

○ 退院促進強化事業専門研修

3月14日（金）にビッグ愛にて、医療・行政・自立支援員など50名を対象に退院促進強化事業専門研修を開催しました。「精神障害者退院促進支援事業の概要」を県立広島大学の金子努教授に、「和歌山県精神障害者退院促進支援事業の実践報告」をやおき福祉会の北山雅史自立支援員に、「精神科医療機関におけるPSWの実践」を七山病院の鐸木俊雄PSWに講義して頂きました。様々なことについての問題意識を高めると同時に、前向きにがんばろうと思うことが出来た、いい研修会が開催できたように思います。

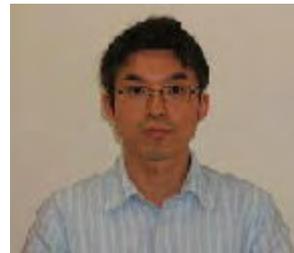
○ ひきこもり専門研修

3月20日（木）にビッグ愛にて、医療・行政・教育関係者など30名を対象にひきこもり専門研修を開催しました。「ひきこもり家族への支援」を湘南クリニックの檜林理一郎院長に、「一歩踏み出した当事者への支援」をエルシテオの金城清弘理事長に講義して頂きました。ひきこもりの中に、広汎性発達障害の方の占める割合が高く、今後、その個別の対応が必要であることが理解できました。



精神保健福祉の第一線で働く関係スタッフの紹介コーナーです。
今回は、障害児者相談センターゆずの大前健さんです。

はーとふるネットワーク



一 障害児者相談センターゆずでの勤務はどれくらいになりますか？

平成19年4月から勤めだしまして、20年4月で2年目になります。

一 相談員になられたきっかけは？

法人内の知的障害者更生施設で生活支援員として約8年勤務したあと、人事異動によって現在の職場である障害児者相談センターゆずに来ました。

一 この仕事をしていて良かったと思う時はどんなときですか？

色々な相談をお受けしますが、自分が少しでも相談センターゆずを利用される方のお力になれていると感じる時です。あくまで私たちはサポートするという立場ですので、障害をお持ちの方が自分の希望する生活を主体的に送ることについて、ほんの少し後ろから支えることができればと思います。

一 仕事で苦勞する点はどのようなことですか？

相談に来られる方の思いを自分の中に同じように感じてサポートする側になっているかどうか、誤った解釈をしていないかを常に意識します。

一 障害児者相談センターゆずのPRを一言お願いします。

精神・知的・身体 の3障害を対象とした相談支援事業所です。生活サポート、福祉サービス代行、手話通訳者

派遣、住宅サポート、専門家の派遣（PT・OT・精神科Dr・盲、ろう学校教諭など）、を行っています。相談支援専門員4名、支援員1名の計5名の職員が常駐しつつでも対面しての相談を可能にしています。夜間や休日は専用携帯電話を職員が持つことで、緊急な対応も可能となっています。

また地域自立支援協議会の事務局をさせていただき、新宮東牟婁圏域の障害児者サポートネットワークにおいて中核的機関となっています。

一 休日はどのように過ごされていますか？

家族とドライブや買い物に出かけることが多いです。個人的には映画が好きなので映画館に足を運んだり、DVDでよく鑑賞しています。

一 今後の抱負を教えてください。

様々なケースにあたることで、自分の中の引き出しを多く持ち、柔軟で多様なサポートができる相談員になりたいです。

一 大前さんから、次の方のご紹介をお願いします。

「東牟婁圏域障害者就業・生活支援センターあーち」の坂本真一さんです。

研修等のお知らせ

(申込み・お問い合わせは当センターまで)

○ 精神保健福祉関連新任者研修会

日時：7月14日(月) 9:30~15:30

15日(火) 9:30~15:30

場所：和歌山ビッグ愛

対象：精神保健福祉業務に従事して、概ね5年以内の担当者

内容：「精神疾患と精神障害の理解」

「相談の受け方の実際」

「障害福祉サービスの提供について」

「障害者と人権」

○ 和歌山県こころのレスキュー隊隊員養成基礎研修会

①日時：7月28日(月) 9:40~15:30

和歌山ビッグ愛

②日時：7月30日(水) 9:40~15:30

田辺市生涯学習センター

対象：精神保健福祉従事者

教職員等関係機関職員

○ 思春期セミナー

日時：8月11日(月) 13:00~15:30

場所：和歌山ビッグ愛

対象：教育・行政・医療・施設等で子どもに関わる者

講演：「思春期の自傷行為の理解と対応」(仮題)

講師：国立精神・神経センター精神保健研究所

自殺対策総合センター 松本 俊彦

平成20年度研修予定

こころの健康講座

社会復帰関連問題研修

精神保健福祉専門研修

嗜癖関連問題研修

トラウマティックストレスケア研修

こころのレスキュー隊実践研修

社会的ひきこもり講演会

社会的ひきこもりサポート研修

うつ・自殺対策研修

編集後記

ガソリンをはじめ、さまざまなものが値上がりし生活を圧迫しています。少しでも節約をと考えますが、。新年度になり、センターの職員も異動がありました。本年度も職員が一つになり事業に取り組んでいきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。